

私の研究から見た環境問題への新しい取り組み

B0691003

神学研究科神学専攻

八田理沙子

[要約]

この論文では、神学部で学んだ聖書学と倫理学を中心に、自分が実際に行った授業案「環境問題といのち」を使用しながら環境問題について考え、私の研究からの環境問題への取り組みを考察していきたい。

私は、神学研究科に属し、実践神学を中心に、現代の私たちに適応する形での神学を提案したいと考えている。実践神学において、環境問題にどのように答えるかは重要なポイントであり、環境問題と神学は、接点を持っているといえる。その接点とは、環境問題に対して科学が答えられない問いに答えるということだ。神学により、自然と共存することに意味を与えることができるからだ。

2006年度高校1年生に実際に行った「環境問題といのち」では、聖書（創世記1-3章）を根拠に、人と自然との関係について考察し、聖書の根拠を実体験の中から理解するものとした。聖書から導き出した「共存」をキーワードに実体験に基づくものとして、食事からアプローチし、「鶏を殺して食べる授業」を参考に、人間は、自然との関わりの中でいのちをもらって生かされていることを実感してもらった。だからこそ、自然を破壊するのではなく、共存し、守っていかなくてはならないのだ。

私の研究は、新しいエコパックや新しいエネルギーを作り出すことは出来ないが、こうした授業を通して、なぜ人が自然と共存していくのかという問いに1つの答えをもたらすことができる。私の研究からの環境問題への取り組みは、神学的アプローチを使って、環境問題への取り組みに意味を持たせることである。聖書を今の環境問題に相応しい色に輝かせ、人々に伝えることが、私の研究の取り組みである。

はじめに

現在、私は神学研究科で学びながら、ミッションスクールで宗教科の非常勤講師をしている。自分が学んだことを、人に伝え、私が豊かにされたように人々を豊かにすることが私の夢である。今、その夢の一步を踏み出し、試行錯誤する毎日である。昨年、私は高校一年生の宗教科を担当し、「いのち」を年間テーマに、「自然といのちの関わり」について聖書と資料を用いながら授業をした。その中で「環境問題といのち」についても取り扱った。

この論文では、神学部で学んだ聖書学と倫理学を中心に、自分が実際に行った授業案を使用しながら環境問題について考え、私の研究からの環境問題への取り組みを考察していきたい。

私の研究

現在、私は神学研究科に属し、実践神学を専攻している。実践神学とは、典礼学、説教、カテキズム教育学などの司牧教育を指す。現代では、司牧教育だけでなく、現代の教会人全般の具体的生活と課題についての神学的取り組みにまで拡大されている¹。そのため、科学技術の発展によって急激に変化する現代の人間とその環境の関係は、実践神学の重大な問題となっている²とされている。環境問題について、神学はどのように応えることができるか重要なポイントになっている。

修士論文では、「キリストであるイエスの意義と解釈」というテーマで日本文化に根差し、実体験において習得できるイエス・キリスト像を探している。ナザレのイエスを出発点とする下からのキリスト論³を用いて、現代日本においてイエスはどのような意味でキリストで有り得るのか。また、どのような救いをもたらすのかについて考察している。聖書を2000年前のものではなく、現代に生きる私たちにとって意味あるものとして捉えたい。

このように、神学を現代の私たちに適応する形で、提案したいと考えている。高校生に教える際も、上記で述べたことを意識し、宗教の授業を行っている。

環境問題について

環境問題と神学は、接点を持たないようにみえるが、そうではない。環境問題に目を向けると、吃驚するような現実に出会う。2030年までには地球の平均気温が少なくとも1度上がり、100年以内にはモルジブなどの低い島や海岸都市は海の下に沈む危険にさらされ⁴、30年後には地球上の生物種の4分の1が絶滅する⁵とされている。その他にも、私たち

¹ 岩波キリスト教辞典「実践神学」p477

² 岩波キリスト教辞典「環境」p249

³ イエスの人性すなわち歴史的人間イエスから出発しつつその神性に至ろうとする。

岩波キリスト教辞典「キリスト論」p315

⁴ 地球をまもろう p14

⁵ 地球をまもろう p12

の身近な問題としてヒートアイランド現象と共に熱帯夜の増加などが挙げられる。これは、実際に体験している環境問題だ。このように、現在地球は大気汚染・温暖化・酸性雨・砂漠化だけではなく様々な環境問題にさらされている。それに対して、バイオマスや太陽光発電などの様々なクリーンエネルギーの開発の取り組みがなされている。

神学は、環境問題に対して新しいエネルギーの開発や新しいエコパックを作ることはできない。しかし、科学が答えられない問いに答えることが出来る。また、自然と共存することに意味を与えることができる。

環境問題と神学

次に、環境問題について神学的なアプローチをしていきたい。ここでは、2006年度に高校1年生に向けて行った「環境問題といのち」の授業を中心に、環境問題について考察していきたい。

私たちは、環境問題の深刻さを頭では理解していて、二酸化炭素を発生させるエレベーターに乗り、普段の生活では、環境問題を考えない自分がいることに気づかされる。それはなぜだろうか。それは、ビルに囲まれ便利になった今の日本において、環境問題は自分の生死に関わる問題ではなく、自分とは遠い存在のように感じるからではないだろうか。こうした状況の中で、どうしたら高校生や私にとって、環境問題がより身近になるかを試行錯誤し、授業を行った。以下では、教案を中心に考察を進めていきたい。

高校一年生「環境問題といのち」の授業

「環境問題といのち」の授業は2006年度高校1年生に実際に行ったものである。年間を通して聖書と実体験に基づき、現代の私たちにも理解できるように工夫した。「いのち」という年間テーマで、生命の誕生や死、生命倫理などの様々な角度からいのちについて考える授業とした。2学期には、「人と自然の関わりからいのちを考える」授業を行い、その中で「環境問題といのち」について取り扱った。「環境問題といのち」の授業では、3時間使い、人と自然のかかわりから環境問題を考えてもらった。1限目では、環境問題について予め考えてもらい、その上で聖書はどのように人と自然との関係について述べているかを確認し、2限目では、聖書の根拠を実体験の中から理解することが出来るように、食事に目を向けて自然との関わりを考えた。3限目では、今までの授業を振り返り、現代の環境問題について、再度捉えなおしてもらった。このように、3時間の授業を通して、自然に対する自分の意識の変化に気づいてもらい、どのように環境問題に取り組んでいくかを考えてもらう授業とした。

1限目 「人間と自然の関わりについて -聖書を使って-

- ・ 環境問題を1つ挙げ、予め調べてきてもらう
- ・ 挙げた環境問題の原因を考え、防止するためにはどのようにしたらよいか考える

(自分の出来ることなど)

- ・ 環境問題から人間と自然の関わりを考える
- ・ 何人かに発表してもらう
- ・ 聖書・創世記 1-3 章を根拠に人間と自然の関わりをみる

環境問題から人間と自然の関わりについて考えると、自然は誰のものか、人間は自然を所有物として支配していいのかなどという疑問が出てくる。確かに、環境問題は、環境を破壊した結果であり、その破壊は人間によってなされている。人間と自然との関係は、破壊し、破壊される関係なのであろうか。旧約聖書は、人間と自然の関わりについて現代の私たちにも語りかけている。旧約聖書において、人間と自然との関係は創世記 1 章に由来する。創世記では、自然を神の被造物として捉えられ、人間は神の似姿として造られたとする。その際、神が人間にその他の被造物を支配せよと命じられたことから、人間と環境の関わりを表わしている⁶といわれる。

創世記 1 章は、確かに神は人間にその他の被造物（自然）を支配するように命じる。それでは、環境破壊は、創世記 1 章に由来した産物なのだろうか。ここで、再度本来創世記 1 章を分析⁷してみたい。

創世記は物語としての緊張や期待は少ないが、行為の連鎖、人物、出来事の関連から物語と呼べる要素を持っている。神の創造の際、命令形と願望形の動詞が使用され、神の命令や願望が、成就するという表現が使われている。ここでは、宇宙の起源について、語り手が全知の者⁸として語り、ゼロ焦点⁹が使われている。この創世記 1 章で特に注目したのが、26 節から 30 節である。ここで、神の似姿としての人間の創造と、自然との関係が語られる。

26 神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして、海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよ。」

29 神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。30 地の獣、空の鳥、地を這うものなど、

⁶ 岩波キリスト教辞典「環境」 p248

⁷ モーセ五書特講Ⅱ講義ノートより以下の考察を進めていきたい。

⁸ 全知の語り手: omniscient narrator は真実を語ると主張し、語ることが信じられるために、神が語り行動することを絶対的に「全知」(omniscient) であるとして語ることにより、読者に対し何も隠し立てしていないという印象を与える。モーセ五書特講Ⅱ講義ノート p 5

⁹ ゼロ焦点: zero-focusing は、事柄の変更などの疑いを持たせないように、語り手自身が物語に介入する際は、「広い視野」(wide angle) の手法を用いる。特定の点に限定された焦点化 (focus) を持たず、出来るだけ客観的であるようにする。モーセ五書特講Ⅱ講義ノート p 6

すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」

上記で人間と自然の関係について語られる「地を従わせよ」「すべてを支配させよう」という言葉に注目したい。この2つは、人間の権力によって自然や動物を押さえつけ、人間の意のままにすると解釈されやすい。しかし、ヘブライ語の用法からその本来の意味を探ると、「従わせる」と訳される **קָבַשׁ** (*kābaš*) は、「足を踏み入れる」という意味も持ち、国や部族がファラオ（王）の所有であることを表す言葉である。「地を従わせる」とは、「土地を所有する」という意味も持ち、人が増えるに当たり、それぞれが土地を所有するようになるという祝福を表す言葉である。1つの民が自分たちの土地を得て、平和に住むようになるという神の祝福の予型として捉えることができる¹⁰。

また、「支配させよう」と訳される **רָדָה** (*rādāh*) は、用例から考えると「歩き回る、あちらこちらへ移動する」の意味で用いられる。創世記1章28節に当てはめて考えるならば、「人間は、他の動物たちと一緒に歩き回る」という文章になり、押さえつけ、人間の意のままにするという意味を持たず、「同伴する」や「指示を与える」などが適切であると考えられる。また、**רָדָה** (*rādāh*) の目的語が家畜ではなく、野生動物であることから、野生動物を家畜のように支配するという意味でもない¹¹。人間と自然との関わりは「神の似姿」として、責任を伴った支配、いわゆる調和・共存が求められている。

人間と自然をあらわす箇所として、もう1つ挙げるならば、創世記2、3章のアダムとイブの善悪の知識の木の物語である。ここで注目したいのが、人 (**אָדָם** 'adam) と土地 (**אֲדָמָה** 'adamah) の関係である。神の掟に背き、善悪の知識の木から実を食べてしまったアダムとイブは自分が裸であることに気づく。その後、神から呪いの言葉が発せられる。聖書の中で神が呪いを発するのは稀であり、その時から人 (**אָדָם** 'adam) は、自分の起源である土 (**אֲדָמָה** 'adamah) に返ることになった。これは、人間と土が交わりの関係をなくし、切り離されてしまったことを示す。最初は自然と結びついていた人間が、自分が取られた土を耕し、そこから食べ物をとらなくてはならない関係という対立関係に置かれた。本来人間と土地は対立するものではなく、共にあり、人間のその一部であ

¹⁰ モーセ五書特講Ⅱ講義ノート p16

¹¹ モーセ五書特講Ⅱ講義ノート p16

ったが、これをきっかけに、人と土地は対立するものとなった。

このように聖書は、古代の物語ではなく、現代の私たちの問題につながりを持つ。人間と自然の関係をみると、人間はもともと自然の一部であり、責任を持った支配、**רָדָה** (rādāh)、いわゆる自然を意のままに破壊するのではなく、共存することが大切であることがわかる。

2 限目 「食事から人間と自然の関わりを考える」 —より身近にするために—

- ・ 昨日食べた夜ご飯を思い出す
- ・ 夜ご飯のメニューを書き出し、原材料を書き出す
- ・ その材料を見て、いのちのあるものに○をつける
- ・ 「鶏を殺して食べる授業」について
- ・ 食事から自分と自然のかかわりを考える

はじめに、昨日食べた夜ご飯を思い出してもらい、そのメニューの原材料を書き出し、その原材料のうち、いのちがあるものに○をつけてもらった。すると、ほぼ全ての食物に○がつくことに気づく。食物にはかつていのちがあり、私たちはそれを毎日食べ、いのちをもらって生きているのだ。最近では、スーパーなどで、加工された食材が売られているため、魚が切り身で泳いでいると思っている小学生がいるほどである。便利になる世の中で、私たちは、いのちに触れる機会を失い、いのちを貰って生きていることを忘れてきているのだ。

そうした中、行われているのが、「鶏を殺して食べる授業¹²」である。これは、マスコミの間でも話題となった授業で賛否両論である。その授業は、文字通り、実際に鶏を殺して食べる授業だ。小学校から大学まで様々な場所で行われている。また、鶏を育ててから殺して食べる授業も行われている。

「鶏を殺して食べる授業」の写真入のプリントを目にした生徒は、普段見慣れない光景にショックを受けていた。しかし、本来こうした過程を経て、私たちの元に届けられる。実際に「鶏を育てて殺して食べる授業」を体験した食品流通科の高校生の作文を朗読した。殺して食べる実習の前日に書いた感想文には、卵の頃から名前をつけて大切に育ててきたこと、毎日世話をして可愛がっていたこと、鶏との思い出、そして、実習への意気込みが綴られていた。実習後の感想文には、鶏を殺すことが本当に怖かったこと、足がすくんで前に出なかったこと、そのときの感情について細かく書かれていた。そして、私たちが食べられるために犠牲になったいのちをもらって生きていること、それを当たり前のように

¹² 「いのちを食べる私たち」・ルポ「ニワトリを育てて食べる授業」の是非を問う

して無駄にしている自分がいること、本当の意味でのいのちの大切さを知ることができたことが書かれていた。最後に、「いただきます」の本当の意味が分かったとあった。最近、学校の父兄から、給食費を払っているのにもかかわらず、生徒に「いただきます」と言わせる先生に対しての苦情についてのニュースを聞いたことがある。これは、本来の意味をわかっていない発言である。

このように、私たちは、日々命をもらって、自然と共に生きている。食事だけではなく、空気や土地、生きることすべてが、自然につながっており、人間は自然の一部として生きている。自然の一部である人間は、破壊するのではなく、自然と共存しなくてはならないのだ。

3 限目「環境問題を捉えなおすー自分に身近な問題としてー」

- ・ 1 限目で自分が考察した環境問題をもう一度振り返る
- ・ 様々な環境問題を一緒に分析する
- ・ 自分と環境問題の関わりを考える
- ・ 授業を振り返って感想文を書く
- ・ 意見交換

一番初めに自分が環境問題について考えた時のことを思い出してもらい、今の自分の考えと照らし合わせてもらった。その後、酸性雨・温暖化・砂漠化などを扱い、最後に人間と環境問題について感想文を書いてもらった。その中で多かったものは、環境問題が身近になったという意見だ。以前までは、自分と自然を切り離して考えていた人が多かったが、私たちは自然の一部として生きていることを実感したことにより、環境問題が以前よりも自分の問題として捉えることができるようになったという。

「環境問題といのち」の授業では、3時間の授業を通して、環境問題を分析することよりも、実際に自分の身近な問題として捉えてもらうことに重点を置いた。旧約聖書で確認した、人間と自然との共存について、実体験に基づく食事を例に挙げ、自分自身も自然の一部であり、いのちを貰って生きていることを体験の中から理解してもらった。私たちが毎日欠かさず食べている食事は、自然との関わりの中でいのちをもらって生かされ、自分自身も自然の一部であるからこそ、自然を破壊するのではなく、共存し、守っていかなくてはならないのだ。

私の研究から見た環境問題への取り組み

私の研究は、新しいエコパックや新しいエネルギーを作り出すことは出来ないが、なぜ人が自然と共存していくのかという問いに1つの答えをもたらすことが出来る。私の研究からの環境問題への取り組みは、神学的アプローチを使って、環境問題への取り組みに意

味を持たせることである。私は、研究科で学んだことを活かして、上記のような授業を行い、高校生に人と自然の関わりに気づいてもらうことに取り組んできた。

このように、現代の日本において神学が環境問題などの現代の問題にどのようにアプローチし、人々に伝えていくことができるのかを探ることが大切である。神学は、科学のように問題に環境問題について環境に直接役に立つものを生み出すことは出来ないが、環境問題にたいする人間の問いに神学的視点を使って答えることが出来る。「聖書は玉虫色である」と聞いたことがある。読む人、時期、場所によって、様々な色に輝くのだ。聖書は2000年前の死んだものではなく、今現在も、私たちに語りかけるのである。聖書を今の私たちの環境問題に相応しい色に輝かせ、人々に伝えることが、私の研究の取り組みである。

参考文献

「いのちを食べる私たち—ニワトリを殺して食べる授業 「死」からの隔離を解く」

村井 淳志 教育史料出版会 2001年6月

「地球を守ろう」 斎藤靖二 訳 丸善株式会社 平成14年9月15日

世界 ルポ「ニワトリを育てて食べる授業」の是非を問う」 村井淳志 2002年5月

2006年度後期「モーセ五書特講Ⅱ」講義ノート 佐久間勤

2005年度後期「生命倫理」講義ノート 竹内修一